



TITLE:

序「カラム」の時代VI:近代マレー ・ムスリムの日常生活2

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. 序「カラム」の時代VI: 近代マレー・ムスリムの日常生活2. CIAS discussion paper No.53: 「カラム」の時代VI.--近代マレー・ムスリムの日常生活2 2015, 53: 4-9

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228637>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

序『カラム』の時代VI

近代マレー・ムスリムの日常生活 2

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム (Qalam)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをもとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各論の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の6編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去5編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス (Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウィ (アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法) によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植

民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領 (現インドネシア) 地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領 (マラヤ、シンガポール) でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ (マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であった。このため、従来の研究

1) 『カラム』誌については、[山本2002a]が詳細な紹介を行っている。

2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス (Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ (Ahmad Lutfi) などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシンでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社 (Qalam Press) を立ち上げた。彼の伝記として [Talib 2002] がある。

3) 現在学術用語としてはイスラムと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっている。

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった [山本2002a: 263]。

関心は民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に集中しており、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにするうえで貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集めたうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学地域研究統合情報センター（以下京大地域研と略記）の共同研究「脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像（研究代表者：坪井祐司）」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で6年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国

立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。そして、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該誌面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている⁶⁾。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースはローマ字による記事見出しの検索にとどまっており、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字に翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト（雑誌データベース班）による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア（Klasika Media）社との提携により行われているもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この成果は、「ジャウィ文献と社会」研究会のホームページにて順次公開されている。翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにするための「カラム雑誌記事データベース」の構築も進行中である⁷⁾。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を

6) 京大地域研の『カラム』のデータベースについては、同研究所のホームページを参照 (http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)。

7) データベースは現在構築中であるが、その一部は公開されている (<http://majalahqalam.kyoto.jp/>)。

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照 (<http://ylabo222.wix.com/jawi#>)。

立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁸⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコーダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である⁹⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコーダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2) ジャウィ文献講読講習会

『カラム・プロジェクト』の活動の二つ目は、マレー・インドネシア語既修者を対象にジャウィ文献講読講習会を開催することである。講習会は参加者を一般公募して行っており、日本において触れる機会の少ないジャウィを学ぶ機会を提供することと、ジャウィに関心を持つ研究者のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年1回行っており、2011～13年は日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウィをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受け、同大学にて開催した。講習会用にジャウィを学ぶための教科書の編纂も行っている[坪井・山本編2013b]。2014年度は、2015年1月30日に京都大学にてクラシカ・メディアのノルズィアティ・モハメドロスマン(Norziati Mohd Rosman)氏を迎え、その一部で日本とマレーシアのジャウィの教授法に関する意見交換を含めた講習会を行った。講習会では、インターネットを利用した外国人等の固有名詞のジャ

ウィ綴りの特定の方法など、現在のマレーシアにおけるジャウィの教授法的一端が披露された。

(3) 『カラム』共同研究

プロジェクトの活動の第三は、『カラム』を利用した研究活動である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心に基づき『カラム』の記事を利用した研究を行っている。共同研究では年に3回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが6編目となる。その内容については次節で紹介することとしたい。

さらに、同プロジェクトが現在力を注いでいるのは国際的提携の分野である。プロジェクトでは『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアにおける共同事業や成果の発信に努めている。

2013年度から、京大地域研とクラシカ・メディア、マレーシア・ジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。これは、翻字された『カラム』記事の複製版およびそれに関する論文集『遺産から展望へ(Dari Warisan ke Wawasan)』を電子書籍として出版するものである。ジャウィの電子アーカイブ化事業はマレーシアのマレーシア国立図書館、言語図書館(Dewan Bahasa dan Pustaka)との提携のもとで行われることとなり、2014年11月には、京大地域研の原正一郎センター長の参加を得て国際会議が行われた。また、2015年1月30日には京大地域研にて公開セミナー「『カラムの時代』と現代を結ぶ——マレー・イスラム定期刊行物の翻字復刻・電子アーカイブ化」を開催した。

研究成果の国際的発信も行っている。2014年8月にマレーシア・クアラトレンガヌで行われた第9回マレーシア国際会議(The 9th International Malaysian Studies Conference)にセッション企画を組む形で参加した。セッションでは、モハメドシュクリ(Mohamed Syukri Rosli, クラシカ・メディア)がマレーシア側の事業を紹介し、光成歩、金子奈央と坪井がデータベースを利用した研究について報告した。出席したマレーシア人研究者を含めて『カラム』の現在的意義についての活発な議論が交わされた。

プロジェクトでは、今後ともマレーシアの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

8) 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編2010: 6]を参照。

9) 詳細については、プロジェクトのホームページを参照(<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>)。

3. 本論集の構成

本論集は、『カラム』データベースの分析1編と同誌の内容に関する分析4編からなっている。後者は、イラスト、写真、広告、連載コラムといった『カラム』の諸要素をとりあげ、その世界観を描き出そうとするものである。以下、内容を簡単に紹介したい。

亀田堯宙「カラムデータベースにおける理解支援——展望と周辺技術」

亀田は、情報学の立場から『カラム』の理解を深めるための二つの方法論を展望している。第一には、カラムの文章内に現れる専門用語や引用記述などについて、対応する外部データベースのデータを見つける技術(Entity Linking)である。同誌に登場するクルアーンなどの書籍や他の定期刊行物の記事からの引用について、引用元に関連するデータベースと関連付ける可能性が指摘される。第二は、「何が」語られているか、それが「どう」語られているか、というレトリックを情報学的に分析する技術である。そこでは、文の間の関係性や単語の分布などに着目して文章の構造を解析する手法が示されている。

山本博之「イスラム雑誌『カラム』の風刺画」

山本は、『カラム』に掲載された三つのイラストをとりあげ、そこにこめられたメッセージを分析した。3点のイラストは、いずれも当時のマレー・ムスリムが岐路に立っていることを示す絵が含まれていた。ローマ字(とそれに付随する欧米式の生活様式)かジャウィ(イスラム式の生活様式)か、冷戦下でアメリカにつくのかソ連につくのか(またはそれ以外の道があるのか)、そして高床式家屋(自然環境や伝統文化を守る方向)か工場(工業開発と経済発展を求める方向)かという選択肢が描かれ、その進路を問うたのである。言葉ではなく絵を使用することで、書き手と読み手がメッセージを共有したときに皮肉や批判が伝わる一方で、メッセージが共有されなければ皮肉・批判も悪意も伝わらないという風刺のあり方を見ることができる。

坪井祐司「『カラム』が切り取った世界Ⅱ——1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化」

坪井は、1953～56年に『カラム』誌が掲載した写真

およびそれに関連する記事に焦点をあて、当該時期におけるマレー・ムスリム知識人の世界観を分析する。創刊当初の50年代初頭と比べて、50年代中葉の同誌ではマラヤ、インドネシアといった東南アジアの記事・写真が増え、中東など他地域のイスラム諸国の比率は低下した。内容も、女性の写真を多く掲載した華やかさはいくぶん失われ、その分上記二国の国内政治や国際政治が中心的に描かれている。このことは、世界的な冷戦構造が強まってイスラム世界もその中に巻き込まれつつあったこと、マラヤ、インドネシアが民族主義的な国家建設に向かったことで、宗教による境界を越えた連帯を主張した『カラム』の政治的立ち位置が狭まってきたことを示している。一方で、アメリカの生活を紹介した記事には写真がふんだんに盛り込まれており、そこには同誌の近代主義的な側面がみとれる。

光成歩「大衆誌から宗教誌へ——広告にみるカラム誌の立ち位置の変遷」

光成は、創刊から1956年にかけての『カラム』掲載広告の推移の分析をとおして、『カラム』が総合誌から宗教誌へとその位置づけを変化させたと論じる。初期の広告欄に表われていた消費や芸能などの娯楽要素は、UMNOによる糾弾事件(1953年)を機に失われ、ムスリム同胞団の結成時期(1956年5月)には明確にイスラム的要素の情報発信に力点を移した。1950年代はマラヤにおいて政治的独立の枠組みが論じられ、マレー人右派政党UMNOの優位が確立していった時期である。この過程で、宗教を軸とする政治的主張は影響力をそがれていった。同じカラム出版社が発行した女優の写真や扇情的な小説を売りにした芸能誌『アネカ・ワルナ』が若者の人気を集める商業雑誌となる一方、『カラム』は消費や娯楽と関わる商業広告の掲載をやめ、より限定された読者を想定してイスラム的要素を強調するようになった。

金子奈央「読者の日常生活におけるハラル」

金子は、『カラム』誌に掲載された読者からの質問コーナーにおけるハラル(Halal)に関連する質問に着目し、マレー・ムスリムが持っていた日常的なハラルに関わる疑問や問題意識について整理する。この時代の社会やイスラムをとりまく環境の変化に伴い、物ごとや、行いにおけるハラル(許されるもの)、ハラム(禁止されるもの)の価値判断基準に対する多様な疑問マ

レー・ムスリムは抱いていた。質問が集中したのは、「お金」、「文化」、「飲食」、「イバーダート(ムスリムが守るべき義務)」の4点であった。彼らは、近代国家という新しい統治枠組みのもとで、イスラム以外の習慣や文化、ムスリム以外の人々と「交わる」ことが日常的である一方で、一人のムスリムとしてハラルを実践し続けるための知識や知恵を持つことが求められた。「ハラル」の実践を日常生活の中で理解しようとしていたことが、彼らの投稿から垣間見える。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、当該時期の社会全体への位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の4編の論考から浮かび上がる『カラム』の特徴とシンガポールを中心とするマレー・ムスリムにとっての1950年代という時代性について簡単に記してみたい。

そのうち3編の論考は、いずれも前編[坪井・山本編2014]の続編といえる論考である。坪井は写真、光成は広告、金子は読者からの投書に焦点をあて、読者として想定される主に都市部のマレー・ムスリムの世界観や生活の様子を明らかにするものである。さらに、本編では山本がイラストをとりあげ、編集部と読者のメッセージのやり取りを明らかにした。そこから、当時のマレー語雑誌の持つ大衆的・双方向的性格が見て取れる。

これらの分析から、多民族社会、しかもムスリムが少数派である都市部において、彼らが自らの宗教的な正しさと社会との折り合いを模索する姿をそこに見出すことができる。彼らは、当時圧倒的な力を持っていたアメリカに代表される西洋近代とその都市文化に憧憬を抱きながらも、日常生活や消費活動においては宗教的に正しくあろうとした。金子論文からは、彼らが異文化との日常的な接触の中で社会における立ち位置を定めていることがわかる。

さらに、本編の坪井、光成の論考からは、1950年中葉に『カラム』が内向きになっていくという年代的变化がうかがえる。1950年の創刊当初、『カラム』の一つの特徴はその国際性にあった。写真記事は中東のイスラム圏を中心に全世界を網羅しており、広告には国際的・近代的な消費物資があふれていた。しかし、50年代中葉になると、写真は東南アジアの政治関連のもの

が中心となり、広告も宗教色を強めた。これは、光成が指摘するように、53年のUMNOとの対立を転機として、『カラム』を取り巻く環境が厳しくなり、内容も変化せざるを得なかったことによるものであろう。くわえて、マラヤでは各民族政党の連携による独立に向けて大きく舵が切られ、インドネシアではスカルノ政権下でイスラム政党の停滞が明らかになった時期でもある。『カラム』が内向きになった背景には、イスラム勢力を取り巻く時代状況全体が変化したことも指摘できる。

このように、『カラム』は一貫してイスラム近代主義的な思想にもとづいた言論活動を行っているが、子細に時期を分けて総合的な分析することで東南アジアのイスラム世界全体の変化を浮かび上がらせることが可能である。本編では1950年代中葉までであるが、後の時期まで射程をひろげることにより、『カラム』の時代としての1950、60年代のマレー・ムスリムの社会史を描くことが可能になろう。そのためには、亀田が提示したような情報学的手法の利用を含めて、共同研究を通じてデータベース全体を様々な角度から分析することが不可欠である。そうした作業により、20年間にわたって発行された『カラム』の資料的価値が最大限に発揮されることになると考えられるのである。

参考文献

- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司、山本博之編 2011 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編(CIAS Discussion Paper No. 19)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2012 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計(CIAS Discussion Paper No. 23)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2013a 『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成(CIAS Discussion Paper No. 32)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b 『ジャウイを学ぶ(CIAS Discussion Paper No. 38)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2014 『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS

Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究情報統合センター。

山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。

山本博之 2002b 「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方:20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。

山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究情報統合センター。